

東日本大震災から私たちは何を学ぶのか ～震災現場がこれから生きる 私たちに語りかけること～

東日本大震災の現場で災害支援活動をしてきた自衛隊員、消防士、市職員、大学教授などの各種機関の職員が一堂に会し、7月30日、市中央公民館でパネルディスカッションが行われた。震災の現場を肌で感じてきた人の体験談が、私たちが災害に遭った時、個人、家族、地域に何ができるのかを教えてくれる。それぞれの報告を通して見えてきたものとは…。

「自助の精神」と「共助の精神」が大切



Tomiki
Shinohara

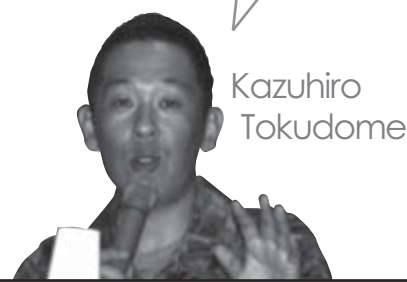
しのはら とみき
篠原 富樹さん

宗像地区消防本部 消防総務課主幹

私たち消防職員は、災害現場に立ち向かうときは、一人でするのではなく、隊で活動します。その部隊活動で最も大切なことは、お互いの信頼関係です。私たちは時に、仲間に命を託して災害現場に入っていきます。今回の派遣は、私は消防隊と救急隊の責任者という形で出動しましたが、派遣された一人一人は、その意味をよく理解し、消防職員として「自己犠牲の精神と奉仕の精神」で尽くしてくれました。肉体的にも精神的にもきついはずなのに、不平不満を一言も漏らさずに、常に被災地、被災者のことを考えて行動していました。このような仲間と共に活動できたことは、責任者として心強く、また感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今回の震災は被害が広範囲にわたり、しかも津波と原子力という複合的な災害になっています。そのような状況では、公の援助が行きわたるには時間が掛かります。そこで最も大切なことは、自分自身の命は自分で守る「自助の精神」と、地域の皆で助け合うという「共助の精神」です。

最悪のケースを想定して、計画を作っておくこと



Kazuhiro
Tokudome

とくだめ かずひろ
徳留 和弘さん

陸上自衛隊第4師団
第4後方支援連隊第3科長

最悪のケースを想定して、計画を作っておくことが必要です。その地域で発生する可能性のない災害の防災計画は考えなくても構いませんが、発生する可能性があるものは全て最悪のケースを想定して、防災計画を作っておくことが必要です。そして発生する可能性が高いものから優先して防災計画を準備しておくことです。

今回の震災は津波と原発という複合災害でした。原発事故の発生する可能性は低いですが、一回起こると被害が深刻となります。

搜索をする中で隊員が常に心掛けていたことは、遺品やアルバムなどの思い出になる物は必ず保存して役所に届けるということです。

われわれが支援をしていて一番印象に残ったことは、被災者を元氣付けようと思って活動するのですが、逆に元氣をいただいたことです。被災者のかたがたは「ありがとう、ありがとう」と頭を深々と下げてくれました。われわれの元氣の源は、笑顔をいただいたことでした。この仕事をやって良かったと思っています。

何をしたいかではなく、何を求められているか



Norihiro
hotta

ほった のりひろ
堀田 典宏さん

福津市地域生活部商工観光課
商工・ブランド推進係長

支援に行く人は、被災者の近くで炊き出しや瓦礫の撤去などの活動をしたとしても、行政の事務的な仕事を求められることがあります。「何をしたいかではなく、何を求められているか」という視点で活動することが大切だと思います。

私が被災地に入ったのは5月上旬で発災から2カ月後です。被災地では、「ぎょうざの山八」と一緒に、炊き出しをしました。また行政の事務的な仕事として、拾得物の管理・公開をしました。自衛隊や気仙沼市の建設課が拾得物を運んできます。その拾得物が、どこで拾われたのか、誰が拾ったのかなどを帳簿に付けて整理していきます。

今回の震災は、全てが想定外の規模で起こり、復旧・復興にはかなりの時間を要することから、長期的な「駅伝的支援」が必要だと感じました。支援者は駅伝のようにボランティアのバトンを受け取り、次の人にバトンを渡していく。短期的な「成果」というよりも長期的な「経過」を重視して活動していくことが求められているのではないのでしょうか。

小中学生の生存率 99.8% は奇跡じゃない

地震や津波をどれだけ自分のこととして考えていたかということがポイント



Takayuki
Karube

かるべ たかゆき
加留部 貴之さん

九州大学大学院
統合新領域学府 客員准教授

釜石市の中学生たちの事例を紹介します。3月11日地震が起きました、中学生たちはこれまで教えてもらったことを基に、近所の小学校に向かいます。中学生は「逃げろ」といって小学生の手を引いて逃げていきます。途中途中で大人たちにも声を掛けていきます。「逃げろ」「とにかく逃げろ」「逃げるんだ！」と大きい声で叫びながら、逃げていきます。そして自分たちが担当すると決まっていた高齢者の家に向かいます。高齢者の家では「ばあちゃん元気か、じいちゃん逃げたか」と声を掛け「避難済み」という札を玄関に貼っていきます。これで外から見たら一目了然です。そうして高台に逃げていきます。

当初避難する予定だった土地が、がけ崩れを起こそうだということで、中学生の判断でさらに高台に逃げていきます。逃げていく途中で、幼稚園児を連れていく一団が見えてきました。先生たちが子どもたちの手を引っ張って逃げていきます。とてもこれでは間に合わないと思った中学生は、小学生の手を引きさらに幼稚園児を背中にしょって、周りの大人たちに「逃げろ、逃げろ、逃げろ」と声を掛けさらに逃げていって、なんとか津波の難を逃れて、99.8%の生存率だったということです。中学生の「逃げろ」という声を聞き、逃げる姿を見て、一緒に逃げて助かった大人たちもたくさんいます。

釜石市の学校ではどんな防災教育がなされていたのかというと、きっかけは先生が子どもたちにアンケートを取ったことでした。「地震が起きた。家に一人です。あな

たならどうしますか？」ほとんどの子どもは、こう答えたそうです。「家で親の帰りを待つ」。そのアンケート結果をPTAを通じて大人たちに見せました。親たちは真っ青になりました。「なんとかしないといけない」。東北では「津波でんでんこ」という言葉があります。「何かあったら、でんでんばらばらに逃げる」という意味だそうです。東北地方三陸沿岸は、一生のうち一回は津波に洗われる」と言い伝えられています。そこで、大人たちには「自分の子どもが逃げていると信じて逃げろ」、子どもたちには「とにかく自分自身が真っ先に逃げろ」と徹底することになったわけです。子どもたちに伝えた防災教育の3原則というのがあります。

- 1 想定を疑え(ハザードマップを信じるな)
- 2 最善を尽くせ(臨機応変にやってほしい)
- 3 率先避難者たれ(とにかく逃げろ)

子どもたちに具体的にどんな教育をやってきたかといいますと、たとえば国語の時間に過去の津波の読み物を読んだり、社会の時間に震災の歴史を学んだり、理科の時間に津波や地震のことを学んだり、家庭科の時間に炊き出しをしたりします。ここまでは私にも習った記憶はありますが、算数や数学の問題で「何時何分に地震が発生しました。震源地から何キロ。あなたの走る速度は毎秒何メートルである。何分以内に逃げなければ津波に巻き込まれるか」という問題が出てくるんです。また、高さ3メートルや10メートルの津波がどのくらいのものであるかということを実感させるために、校庭に出て高さを確認させます。ここまでして小中学生の生存率が99.8%なんです。地震や津波をどれだけ予想できたか、どれだけ自分のこととして考えていたかということがポイントです。

これだけの地震が起きたのです。行政だけで何かできるわけではありません。市民だけでやっているわけでもありません。だから総力戦で臨まなければならない。そこに「共働」ということが必要になってくるでしょう。「自助だけでなく、共助だけでなく、公助だけでなく、総力戦で臨むんだ」というのがこれからの防災です。

女性消防団員を募集します

「自らの地域の安全と安心は、自らで守る消防団員」市内居住者か、勤務している女性を募集します(男性も常時募集しています)。

問い合わせ 市生活安全課(福間庁舎)

☎43・8107

※入団前に簡単な面接を行うことがあります。



▲消防団員の活動(男性)